Book Review

公共図書館の経営－地域のまちづくりの拠点という観点から－

関西学院大学法学部 教授　小川 大和

本号では、少し観点を変えて、公共図書館の経営という観点から、参考となる書籍を２冊ご紹介させていただきます。公共図書館をとりまく状況は大きく変化しつつあると理解しています。公共施設の一つとして、多くの図書館では老朽化による更新の時期を迎えており、他方で、市町村合併や都市のコンパクト化等を背景として、統廃合・複合化など、施設配置の最適化が求められています。人口減少・年齢構成の変化や自治体財政状況の悪化の影響を受けていることは他の施設と同様であり、前者では利用需要の変化等、後者では予算・人員の減少等の傾向を示しています。一方で、デジタル化の進展等を背景として、知識・情報の生産量・需要量は増大していくことが見込まれており、これまで以上に効率的・効果的な経営が求められていくと考えられます。

そのような中、公共図書館の重要な経営課題は様々あると思います。その一つとして、地域のまちづくりの拠点としての機能の強化が挙げられます。図書館は、住民の皆さまに知識・情報を提供するということが最も重要かつ伝統的な機能かと思いますが、近年では、地域のコミュニティの場として交流や集客、賑わいを創出するという機能も重要になってきています。文部科学省における「これからの図書館の在り方検討協力者会議」での「これからの図書館像－地域を支える情報拠点をめざして」（平成18年３月）では、「まちづくりや地域の振興、活性化を図るには、図書館が核としての役割を果たすことが重要である」と記載されています。実際、多くの自治体の総合計画、地方創生の総合戦略、中心市街地活性化計画等において、まちづくり政策の一部として図書館が位置づけられております。

少し前置きが長くなりましたが、そのような観点から、参考にしていただける本をご紹介します。１冊目は、『公共図書館を育てる』（永田治樹／著、青弓社、2,860円）です。本書では、まず、エンジニアリング・コンサルタントとして世界的に有名なアラップ社の調査レポート「未来の図書館のエコシステム」にもとづき未来の図書館像を示すことから始まります。その後、そこにつながっていくかたちで、イギリス、オランダ、デンマークなど海外における「図書館とコミュニティ」、「図書館と（最新の）技術動向」に関する先進事例が紹介されていき、最後に、日本における未来の図書館がどうあるべきかを提言しています。現在の日本の事例については、多くの情報が書籍・インターネット上にありますが、日本だけでなく海外の事例も踏まえて、今だけでなく未来の図書館のあるべき姿を考えていただくうえで、とても示唆に富んだ本であると思います。

『公共図書館を育てる』
永田治樹／著　青弓社

もう１冊は、『まちづくりと図書館―人々が集い、活動し創造する図書館へ―』（大串夏身／著、青弓社、2,640円）です。まず、まちづくりと図書館の関係についての丁寧な記述があった後、中心市街地活性化事業における図書館の位置づけ、役割とそのサービス・事業の具体例、その評価方法・指標等が示されています。例えば、地域全体を博物館と捉え、各所に散らばる文化資源等をICTによる情報提供で図書館がつなぐという「屋根のない博物館構想」などです。最後に、「まちづくりから『成熟社会』のなかの図書館へ」と題して、こちらは、日本の文化歴史などを丁寧にひもとくことで、将来の図書館のあるべき姿を示しています。１冊目と観点は異なりますが、同様に、とても示唆に富んだ本であると思います。

『まちづくりと図書館―人々が集い、活動し創造する図書館へ―』
大串夏身／著　青弓社